

Honda e のデザイン開発と意匠保護

株式会社本田技術研究所 デザインセンター e-モビリティデザイン開発室

内田 智・佐原 健・明井亨訓・半澤小百合

本田技研工業株式会社 知的財産・標準化統括部 四輪事業知的財産部

荒井秀年

1. はじめに

1) Concept

Hondaは、従来から脱炭素社会に向けて様々な取り組みを行ってきた。しかしながら、2020年に施行される欧州CAFE（企業別平均燃費基準）規制強化に向けて、いよいよ量産電気自動車(EV)の存在が必要と考え、そのために誕生したのがHonda eである。開発にあたっては、まず、開発総責任者(LPL)をはじめとする設計・テストグループとデザインチームが合流し、Honda伝統のワイガヤ（いわゆるブレンストーミング）を行った。そのLPLの第一声は「グランドコンセプトは“This is Honda EV”だ！みんなが創りたいものを作ればHondaらしい商品になるはずだ！」であった。

だが、具体的に商品開発をするためには、自らが想う「お客様の生活をいかに豊かにするか」が必要だったので、全員が納得できるコトバを求めて激論

が交わされた。そして、日常の足となるコミュータがCASE時代に先駆けた機能を持つ世界で、人の生活をシームレスにつなぐ（クルマという概念を超えた）モノという意味で、「Seamless life creator」に決定した【図1】。

2) デザインの方向性

その方向性を定めるべく、「これからの時代に、本当に必要なEVの存在とは？」を考えた。過去を振り返ると、Hondaでは1972年に低燃費車であるだけでなく、機能的で愛着の湧く初代CIVICを販売していた【図2】。一方、CES2017において、AIとコネクティビティによる未来のクルマ「Neuv」をコンセプトカーとして提案していた【図3】。そこから、生活を便利にする先進技術を搭載するならば、初代CIVICが提供していた、「もっとわかりやすく愛着の湧くシンプルなデザイン」がふさわしいと思

●図1

